



風俗文選通釋

廿一
廿二表

人利5
4218
9

8
9
20
1
2
3
4
5
6
7
8
9
30
1
2
3
4
5
6
7
8
9
40
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

利 5
號 4218
卷 9

唐宋風俗文選通釋
詩歌說解
定光後釋
漢狗釋
釋

唐宋風俗文選通釋
詩歌說解
定光後釋
漢狗釋
釋

唐宋風俗文選通釋

辨表

廿一之二

唐風集卷之三

全蜀王五牛年于中華地即

當努力一書寫了而合冊

力十本 著 亂文

夙俗文選通釋卷之廿一
詩歌詠詰辯 犬糞 定先後辯 支考
豆腐辯 許六 天狗辯 木尊
手足辯 汶村 人參辯 許六

射御辯 許六

卷之九

辯類

辯八辨八物八辨定八詳八辨之意八辨
八辨八辨八辨八辨八辨八辨八辨八辨八辨

詩歌詠詰辯

此篇詠詰八中品下上道八章八首八首八首

半山

一士行を火爐壇とよ御庵にてて活字本にて曰泰年
祥齋の内雅焉は汝より中事御たひ流す
ゆる御入念に之れ材量時充もテ書く流一御林
わしもと故不まか事の多みよ淳古人トモトモ
寧ハカニ源持トモ集うちとえんとち経
事の卷い多めと便きしやひとは滑稽の難
呼虚言ト作年佐りりと今我一辨ひ出
彼の傍にあらぬのみへき所に判ひと
此景波人歌人の歌徳ひとしりすひ言ひおちより
利ひて波歌よまくあさんとの序文之泰年
声震山と云泰年祥の致腹聲壤の歌声震却

村童野老も千巻の説と云ふは後漢高鳳字文通
南陽葉人一家以農為業鳳專精誦讀晝夜不息妻
嘗之田曝麥於庭令鳳護雞天雨暴至而鳳持竿誦經
不覺潦水流麥妻還怪問方悟秋杖を朽ちしと之有
小說云石室山中有人圍棋樵夫王質採薪斧柯已爛
是也の古事記聞之千載の風一謝林下折木と
以仰仰精神入不休の形容も亦ハ卷之道之極く
之云ひに以れ。ひとよやけの様といひの極く
致す後日仰仰の様内ひて、ひとよや辨別改葉
四十九丁目と云ふ也之が仰仰のまゝの五十九

海賦

此書の序と論、其の主なる所がては前代を
とて時代の後づりゆる所の多く存つて古今
集めたり假名の序の頃よりてまでと其間まぢに
うり身の外とひよのまうれ事もあらわす
が爲めあはれ

門もやうやくおとこの方の内
は士氣あいかれよまへども立

聖朝の御代は伊豆より太平記十四巻云伊豆の彦
おとし今東野七里山七里と號すとすと
牛久唐古村とよきとよきとよきとよきとよ
とよきとよきとよきとよきとよきとよ

物の如きを解自在にありせし工肆の跡すらは
なく其を行の處らうへぬり名はせば逆の邊馬がゆ
今まく解ふるゝ事なしと謂すが盤面玉もまた鞍
馬の四方八極ゆゑの事也より上り風流にゆて後向す
跨足勿体無くと同と有り鞍の上乗猪突にて而後
たかがほすり鳴呼快き也モニカ如何ぞし今是ニ乘
り多くハ柳庵より來

此高柳の邊をハ匹の駿馬ハ周の穆王の駿馬の云
拾遺記曰周穆王巡行天下驅八龍之駿馬一名絕地
二名翻羽三名奔霧四名越影五名踰輝六名超光七
名騰霧八名挾翼盤面玉もまた小差盤の上乗猪
突とい四方八極ハ四方八方とソラウ如是の自在

もくやく也但其解とはまづうまゆひを付ひて
愉使となりてゆく如きは今其儀使の如きゆく
もの多くあくハ柳庵より其の本音をゆく事と
御宿の如きや裏笠市竹林鞋をつけて組手する
所一系田舎を廻はむて一石よちみのいきの市中小
押さ陽生の芝草よこせをあくハ当家の少料せよだまみ
士亭と延年山とをもよこせしはと浦と薄と作服束うすゆ
の時小木の船をとおぶ舟をて又そなすすよすよす
もくじそそくまくうきはと浦と薄と作服束うすゆ
の門背戸をすりはりへ砂とぬれむはり色抜きの唐と
りくあわきいとよへて氣のしく如日の如くと聞
せらやくと暮ておもひとぞうけまへ従者を例の

ウニ
本より傍タチへて大の氣カミカミへお門アゲルへ従シテはるはるよの内ナカニ外スズキ

此言仰侍の姿情と云ひ其の如印て詔書よまひす
あひどひ沙人教人の事ひ此と并列する
御古事記は實事の事で考へてゆくよ
やくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
やくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
やくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
やくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
みれのまくまくの御ゆゆゆゆゆゆゆゆ

定先後辭

支考

以篇ハ東西夜話井波遊歎の日暮論と號せらる文章
よりて林紅嵐翁の先達の得失に辯じう故よ辯むよ
出せども二文一考よ井波の用意を

此言二句を讀んで、左の事と合ひ、序文も今
歩く上にあつて、うなづかむる所とす。
かくえんやうの文庫をかうと申へたまつては
済得ぬゆゑ、かくいふ事。

翁子はもとよりはるかに古の事とて御難を
内林紅葉を多きて是もむしろ意の向ふる事
心付ぬ程ハシテまことに此の事の如きがち
而そももももももももももももももももももも
うかうか其の風雅の餘りハももも湖南ニシテ而ゆく
ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア
風雅の又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ

風雅の又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ

翁子はもとよりはるかに古の事とて御難を
内林紅葉を多きて是もむしろ意の向ふる事
心付ぬ程ハシテまことに此の事の如きがち
而そもももももももももももももももももももも
うかうか其の風雅の餘りハももも湖南ニシテ而ゆく
ハアアアアアアアアアアアアアアアアア
風雅の又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ

翁子はもとよりはるかに古の事とて御難を
内林紅葉を多きて是もむしろ意の向ふる事
心付ぬ程ハシテまことに此の事の如きがち
而そももももももももももももももももももも
うかうか其の風雅の餘りハももも湖南ニシテ而ゆく
ハアアアアアアアアアアアアアア
風雅の又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ又ヨリハ

魚目と案は、魚目とあるのを小枕に名づけ其事
より小枕の革の様子と形にて、魚目と云ふ事す
ちの山のむねの海もやうさん

豆腐辨

件六

此篇辨_豆豆腐之用也

正一層とあけ本とれく時豆腐とての二物て有り
新あく甲も以ててるすきくまほに計是くろとひと
うこきれそきくらんぬせまへせめの豆腐と料はせら
芳ら豆腐と石粉金をとててててててててててててててて
豆腐の解とひもやう

此篇が豆腐の古今の考證おほきててててててててて

本とれくとてててててててててててててててててててて
淮南王劉安とよく作まくかと日年と作まくか
すばゆく四ふきとくとくとくとくとくとくとく
甲もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
然うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
豆腐とててててててててててててててててててててて
豆とてててててててててててててててててててててて

豆腐とててててててててててててててててててて

松豆腐五事の歴史と作法と是の行方と豆の事
取れとてててててててててててててててててててて
一事も仁義と自給とててててててててててててて

此篇が今のみよ、圓を歴史と豆の事とててて

首に付する。古入文字の首書同様に刻す
の用意の種々を考へて、その中で因生の事又
仁和のものの中の既往されて來たもの假定す
れぬ。數量の多く豆腐のとくが最も多くて爲る
程子の語りは多分墨端寂滅と配されるべき體用
考究のを助ける。ひだりと今いだてて八國名分ヨクメイ、非揚
和信博家より門へ取て穿てては耳中不寧也
あるま精、あくま未直のちにかくす只一絆の研削して居る
一絆のか

此書獻主一章より割れまゝの如きを整頓へと之義國
名下より出でる名目は下へ黒縞寫本減くい半葉よりちよの
序より黒縞寫本缺滅と號す事有り其も書末の如き

まことに黒端といふ事の如きを云ふ處をり老矣
る寂滅の佛なりとぞもすの用ひの方かの歎えうる
ある事あてぬゆく例の御人名は圓右、ひよ又竹之名
づる源氏の楊右、奈川今川の名尽く用ひる人
よりへ清風の雄と云ふ夕起の有下家とよ庵のとて
今をさうとさうと一聲のゆきとておまほのあひてゆる
歌せまつたとさうかゆひて玉扇底の枕までとうと
汗由じて堯の毛衣とてひぢりゆきとておゆ
いわと天の國家のまことハ御つて帝系萬々身中の勲の
高とまことに木ノ葉ノ葉文う牛ひちひさくに元氣許せう
耳のほとろひゆくじまくわ葉同再折葉うほめう

此言ハシラノノ所ハキムハシラノ所也。許由巢父名譽者也。
ては亦のをとておせらし高士傳曰許由字武仲堯聞致天下而讓焉乃退而遁於中嶽頬水之陽箕山之下
隱堯又召為九州長由不欲聞之洗耳於頬水濱時有
巢父牽犢欲飲之見由洗耳問其故對曰堯欲召我
為九州長恐聞其聲是故洗耳巢父曰子若處高岸深
谷人道不通誰能見子子故浮游欲聞求其名譽汚吾
犢口牽犢上流飲之許由歿葬此山亦多許由山逸士
傳曰許由隱箕山無益器以芋捧水飲之人遺一瓢得以
操飲飲訖掛於木上風吹灑有声由以為煩遂去
之許由巢父ハ山居道士々々人言のを拂走りて
きひかげりて其聲久不絕し許由年八十

洗耳巢父接子けつとて其り少しだけ
破の耳のあいもまは许由、輒すあを今御敷
をぬじよハ其流する巢父接子少しひび
固耳接けくもその共に其妙すがほもアラカ
耳へを含むまゝの只の豆腐にて坐
用名从うきをもててすまひにまきて聞りきと
あはる豆腐をすみれかくひまく田舎豆腐
圓闊二丁の豆腐をまくすはうつ手て
とすまひ甲とうしあくしてしまきとのをかくさん
ぬゆまむちづく破の豆腐をまくまく生の豆
腐がうとアハリハ田舎豆腐の石臼金吉も甚め

開闢二千の三萬年を経て天狗の形をもつて

アヒキルトス

天狗辭

此辭天狗の姿情が世にて仰傳めぬハドモアシムトモ

ミシミシ御傳ハ其事アリトマ

萬の形アリテ之をまく画圖よアリシテ前アリトマ
天狗もアリハナラギトモソニ縫く人吉常ニ多シウツク
ソシテや天狗也アリ古昔眼と四面の鼻よハ周正ム
ラサ

木尊

此名ハ天狗の画圖の事也先代旧事神祇本紀云眼狹

雄尊猛氣滿胸腰而餘化吐物成天狗神姫神而威

強其軀人頭獸首也鼻長耳長牙長獸太怒甚荒
錐木力神乃懸于鼻投於千里錐強堅力大ト輒乍挂ニ於
牙壤作股々毎事出知無穩止一名天逆姬尊吞天逆氣
獨身生兒名天魔雄命生出天地間荒神逆神地增人祇化
吟鬼等皆屬天魔雄命君事駆諸弱神迷惑者起
灾惱謗神師誹仙客不順天尊造為不作煩善云
天狗ハアキのびきと訓テアキは天の運の義とモ天狗也
書てアキのびきとモアキとモ訓テ是天狗のモアキ
アキヒヨイアキアセアリヤ天狗ヨアキハ時此天魔也亦
眷属とある木の系天狗の魔民アキ古法耶の事の傳
房の畫像ハ鞍馬山の布吉の脇ノ行者と云ちの傳也

自是以來、天狗の爲めに作られたものと云ふ。天狗は、此者神祇及教より、人傷生靈の如きのことを能侍の為
してよきと見ゆし世の人の報應をもれ、其事よりて天狗をりて松の木あらず居て、天狗の山位ゆゑ
者の中のうち、やうやくさせの治療のやうと、山のやまの
お行ひの本の毛の天狗をさとて、又ハ大毒ツツキや高
きの山の毛をりて、薬生のちねふゆすて、日暮の山里にま
いり、とき世のやうにあらり。

是より日も天狗のふくびと天狗ハ天魔破命のあら
と神祇も立ちて、又草履屨離世間、曰、善哉、有十種
魔業忘失、善根心修、諸善根、是為魔業、憐惜正法、呵
責法、害衆生、貪求利養、为人說法、為非墨人說、深

沙汰、是為魔業、此經文天狗造の說文、モレ、併況
うり出で、又釋教のせん人又放執情慢りて、ち名
利根おもむく魔界に入りて天狗となりて人傷もせん、而る鬼畜
の形うね、生類の終も入きて、乞仰修の法式みて、仰修
のみ、能き、わざとしとく

豪宕山ハ山城のふくべ、白山祖日御事とぞ、豪宕山の
主御房、石屋術太郎とぞ、奥院ハ太郎房の社、ソヘモ
神社也云、江戸キテ、真濟満殿、皇后ハ又主を尊て死
鬼魅となり、其夫太天狗となり、太郎房もそつて、江戸
忠仁公の始文徳帝の後、ち雄山ハ山城本所の西北里
許、今本の主天狗ハ壁石主とぞ、その上に之を守る
大井川ハ江戸吉野山の奥焉、山主とぞ、江戸守り

吉山文集

まことにあつてや風もひいて、まかに風のめまめのまゝ
まことにあつてや風もひいて、まかに風のめまめのまゝ
山の次か房松島のて、房太翁の花魁は思ひ一堂金年六
百歳のう房不吉ひき能の供奉をも思ひよ便ひ天狗
ゆくと名うるともひき御もひての里す出ちやさうじ
虚氣のう思ひまくらへぬをも思ひたまうす
お母と全じく強のいだよつてのを亡びぬまうと共
解脫の奉向より、こゑれがましめのたんじ
立てまんけの道よほ爲て身、心中のまよよひは
黒ハ竹生行よ送らむて、臺物を云教よふ今

若義考曰清別仰木の里或百歳の年十五六もうもう
敵山のうと繪住すす年もうう五和年一月仰生采
の葉のう大師堂のあてはとて往方うゆみ里六葉院
萬中後
日到り乍ら少童の傳又う考めう思ひて少翁て清故
おうけく煙をうちの後件の小童又大師堂のもとよ花
うて立候うじに連てゆきぬりてはとて空聞くわせよ
うて立候うる山伏一木と名ハ汝古の神主くい縫
えうね森の梢を立候うもよすて、掌のう崩等を冷
しよ大石やうて縫ひやんとひうのねよ民井の社
國廟の前をあと扇つまうとき名ら大ててを軽くも
思ひまう一木岐今うそくハ汝の傳文のあと云ふを

坂をつる山と山王様の業がては誰かがさす
さて則のうそを拵ふ者たゞ後悔して人皆
まよき事と云ひてはいふがゆきからず一寸の間
もあらざれむのむら法勝の力も塔の効もも
大勢とあるの塔の効をうながす者をせせり一寸の間
此大病の罪もアヘ天物をめぐらしきぬけを爲す
よし弘妙尊ハ相傳テ仰慕師入唐一歸鄉の後全
身が修正の法を修めよきと世業をもて五蘊度
して洛陽達摩町より高麗の祖國今もお坐ひと
恒開寺にて世を教へ移りと其妻天物母がり
もんち酒井ハ平おふの妻にきもうじよもや
うもんち酒井其妻天物母がり也

牛馬の平治の傳云屋ハ修る事無く一茶の御取
御飯が被物をかゝり侍ひて天物とも無事に
至る天物のれども江島半舟の御座はる中の方
もやも文まのゑりて天物のゆゑ云

けん人間の天物の同是深山幽谷のことをいふ事
異に生じる何の性とすかとほれ天物と山谷の事
もよもよ隠れハ不人の事とすも尾を虫ハ糞土の
事もよもよ風ハ食食の事もよもよだす事
此言は無事とす事もよもよとす事ハ御修とす事
もよもよとす事もよもよとす事ハ御修とす事
も食の事もよもよとす事ハ御修とす事ハ
事もよもよとす事ハ御修とす事ハ御修とす事

卷之三

汝村

此篇子之の事、獨々之の事なり。

甲冑のよもじひかくはまを行ひ地獄にまかへる者
よりと國事に従ひて身を失ひ却て死にゆく者
あらまうとふたばゆる

はまくとせやめりてせまちにさすらふ甲斐よりの實
がくの御事は甲斐の實より多きの御事也打め
こゝまで甚もあらずてさすらふ是ハ人情の如れども
ソヘモ改めて通すが如くせよとほんとと
シヨ一身の事にあらずとも貴よとまへ五つに連

まもん又御の地足まで坐ち、我はかたよとおまへ
おふせにまつてみのまへゆき、御の内方とよま
シテおまへひ臂とまへ全體と人萬事と蒙るゆく体
所心事と申す一齋と湯のうへりとまへる事
向後足とわざとがとて、古事のまへる事と御
神利とお別れゆかむる

の事に至りては、その間の事は、傳へておらぬ事多し。まことに
あらゆる所を之によづて、ヒミツと云ふ事は、鷹義すらも知らず
アリハトトハ、もじまつて、あゝ、高麗の事は、ナリカウムと
云ふ、あよねまことまちをかねて、彼の口にせば、
其の事は、早々とすそを、あわせます。の意で、アリハトトハ、
御経の事もあらず、あくへんの事もあらず、あくへんの事も

人參譜

許六

人参の藥の切要搖曳呈散と/or參之氣之根
生是面白人のてまゝのり、參人參の名是よもれ此篇
人參の經脉以て唐和人參印用ひてどうき

支人參の元氣大補の聖藥也
此參也人參の切驗に標也藥性醇厚人參之味甘
大補元氣止渴生津調和漢方固今以梅子
人參と用ひ不升麻の如く上焦の元氣の神の肺中の火也即
夜參也此す元氣の神の胃中の火也清心安神甘
美の如く大補心の火也降火而入氣の神の君火也

の如く肺に生れ薑に生れ氣に神る血脉も有る
人参が用ひて氣にませば血育まず藥局の不之を
以て而生と見る事とぞうべき事の如醫人參生で
人不廢すと云ふ事とぞうべき事の如醫人參生で
多く人参の病あればよき事とん人参の行西ハ治
あらば其の人参の是買ひて世界人參國に生れ
いたる價は直りとも生じる事の累の事より一言も如解
を取らざりて莫れをかうむる事の如醫人參國に生れ
の度にぬきうといせきう人の如醫人參國に生れ
被人參國に生れ薑に生れ氣に神る血脉も有る
従ふの價は生れ薑に生れ氣に神る血脉も有る
參の力也とあらわし人参の生れをうつへと喜ぶ醫人參國に生

人參生すと走り死ぬるをせよ人参不殺すと考うと人參
あらば其人參生と人命助け又人參生と人命救す生れの
薑用ハ持ゆて走りて走りて、これが即ち參生はいぬが傷
きんせきの生れの病人参生て死ぬ
病人をうて活るやうい些うの内人參生て死ぬ
すと走り生れはもとじゆの傷なり

此医師の人参が用ひ得玉の湯を四春日肺下實熱并
陰虛火動勞嗽吐血勿用。肺虛氣短者氣虛喘煩熱
去芦ヲ用之及藜蘆。病家有小毒者少少と價の爲
真毒者以爲之正解。人參の根解の北韓靼の南境白
山を出り越えよ。人參が高止す處ノ名ハ山西の潞
安北東の平雲南の姚安と云ふ上品とす

是を解説する所までとて唐の本草書の如くは
都人參の傳をもつて解説の處と云ふ事
ヨハ至る上の解説としてあらば能むべからず
今之既に之を解説する事

さかまく不平を上の少物が我づまうる事無

紫の物とあるを其医のそらうの事と云ふ事無
是の全病の別名を云ふ事と云ふ事と云ふ事と
根茎葉の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人参の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

是の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
其功驗をえん氣のゆい人全病を治す事と醫師の
過ちも大體内寄せる病と用ひて却て效く事と
あり生氣の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
用ひらるゝ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
方病と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
而用ひ方病と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
印子病と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人參醫と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
うつ病と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

我沉疴老妻と云ふ人參作用の唐の本草書の產
物と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

病者八事の考功を効き而、病氣又々脉に従
シテ尋ねて尋ねて病氣と而の形を察する所を今見
ゆるに於ては人參よりと輕く之を察りて之を以て
其功を立てる事少くてもうかる事多く極めて之を以て全
のきめらかにあらわす事多しと見ゆる。さうして
あるる時月に亘る多額の經度の間の微細の所が
氣をもつてとれる所もあつる。

此書行六自之の経験ノ記とて庸医の人參作用
やくの速くも是處をさりて沈疴より病氣や

ゆくゆく

我思ふ唐の波とす故方の医事は皆唐人參を以て
有也爰々參根解よ波とハ其國所而紀す。唐人何のを云

八

之の書は川芎芍藥の如きを主として茱萸鹿茸の如
様をすばりと氣の通うる圓不離してあるをもととせらる
如きを區々細分してあらう。医者醫學のもの
方のつ作者の商ひとてみる所は不思議也。い
ふべきはつづねの卷之後、上卷の止瀉固熱下利
萬能丸はすこひ考ひて之を思ひ不思議也。其體古昔
來川芎芍藥の如きを主として醫事の枝をよしん
道が蓋て地で實じて其一物のよし其餘は嘗て治の如立
つて以て是故乎の字を書く。不思議であらう。今のよしん

無事ある間の活潑からゆるの役には必ずて文書の癡氣
平氣に傳へるゝを未だ漢字が聲まで上の名医に於じて
せめやうい文書にて素問や本草すらすて彼名の
口業ハナリシキ

此古人之の詮解小字より大字にて化すとくにうれ
あ唐医の瘡瘍ふくよきに喰けの傳之如本綱目小草本寫以
蜀川者^{アカマツド}為勝因稱川草ト云川草も窮きも大病也
其病の優劣^{アカマツド}似得に医事すと教わるもいづれ也
さうう云ふ者多々有りて後世も古くは之の勝因傳也
ヨリハ其傳本の本草と云ひて之の名を承傳する
宣傳のりすと云ひ是丹霞朱震亨のもの也。彦脩医
之源流曰元至正問人得^テ東垣海藏之傳医脈南方為

一時名医之最重者東垣ハ元の李東垣也。素問内經
二帙黃帝岐伯の問答もそのまゝが多耳ハ四經子中
多經神農の作^{アサヒ}也。漢書藝文志云之を漢
平帝の門樓護也。また扁鵲と其名をもつて居る
云ハ被^ヒ名^ヒ人の行業ハきくにと被名^ヒ其名をも
ク也。故医の多くは之のことを西漢^ヒと云ふ事あり
ナレバ知るヤ

或人^{アガ}がのば^{アガ}る^{アガ}虎と云ふ字を多^{アガ}く書^{アガ}て多^{アガ}くかか
至^{アガ}てある所人名^{アガ}といふも多^{アガ}く文書^{アガ}で見^{アガ}る所
甚^{アガ}く少^{アガ}い^{アガ}のつねも日^{アガ}のあ^{アガ}文書^{アガ}で虎^{アガ}多^{アガ}のもの
多^{アガ}く^{アガ}記^{アガ}す^{アガ}也。虎^{アガ}も^{アガ}い^{アガ}入^{アガ}を^{アガ}ハ^{アガ}止^{アガ}り^{アガ}て^{アガ}かう向
き^{アガ}ハ^{アガ}か^{アガ}そ^{アガ}かう向^{アガ}と^{アガ}小刀^{アガ}判^{アガ}の少^{アガ}細^{アガ}ハ^{アガ}か^{アガ}手^{アガ}ざ^{アガ}り

久の後は理屈よどみのまゝ理屈が餘る隙とある
此言あつて文音にせんじて医者の用ひぬべし
又細作のとては虎とあまと書くわざれども
いふて医務も人々の習葉をうするが如く
其の意の用ひ方にかくしたゞき人多き人の
教え、この如きも理窟も甚はしくて細作
のあく下せても皆虎のまゝか、庸医の如く理窟
もて理窟が極ふ迄で、細作はさうありて甚はく
立派のうさくとてらむ。是が人間庸医の方やとへ
はるゝ節で細作はさうありて、先づか、箇中の蘊奥うる
「一味の活の缺乏を云はば、四春衆方起並の勢ひあ
るやま向和並の活て、かくの如きが相ち古の前後而度て

理窟を立てるとは文医者うけがましくつねに、首
うて細作は理窟者うそく甚はく蘊奥うて終事こそ
細作人立てゆく、病の高をば、唐古をば、すうのや
うううのゆきくこそ

かく、霍乱の薬葉、そくしん病、冥うそくは名人の一言、
百年の後も理窟うそくは、ヨリ活よる事す、人全を
きり

此言あつて文音にせんじて医者の用ひぬべし
りん病、冥うそくも、病は、皆從病字、学文すな、
そく病、冥うそく、人全のえよがすくの至葉くそ
一般のあく、又医者の讀はず、學て、こと令紙とあく、
此言あつて、傳する御くも、人全の至葉くそく

射技苑假名雅経自卷ハ物語多切ハ筋也と並用
尤重を要すも主事必於ハトミテノ病正ハ色也りも
キスを算に算也トテ一物也トテ是もハ卷湯
自古有れモ本陽華月也トテ多病ハ本陽也トテ用い
えまに於ハトテモ是種年也前也トテ也トテ病解
も厚の絶量也附也トテ也種年也トテ是也也也也

射御辯

許六

周禮小五射五御也君相又射御之礼也射神也
精射多く通食の御事も精射也舉用也トテ射勝
射也也り也其式武田之三景西流也中興日置
強也正次精妙也得射術也始祖也御也也也往古

もじと武子の始祖其法の傳授後事也トテ今京於
將軍が未天下ちも私也後事也家作也先也古坪
或也補度李ハ篠也房盤也少主原家の作也古也
甚也也也ち坪八原のちも也野也中興の祖也柳
り馬の追也武家の家業也也也也也也也也也也也
ん京の宿衛ハ使習也馬者為上此篇射御辯と言
都也武家の家藝也明無一也猶子の送也

比類也き勇武の本源也也之と百年のち也也也也
三代の微福也絶也也枝也也食也腸也也義也也て形
也也武道也練也肉也也也也也也也也也也也也也
失所也胸也也也也也也也也也也也也也也也也也
老也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

萬行の圓滿教 三思一言の辨

此語許六を武吏のあひ連て此語の前後を之許六を

能宣也の事歟、徇私より起つては實也犯云盛嗣憲光
景清に二人族に拘ひ拘ひ判官ひりそ」所ノ村ノ即往寄
主が村モモト主多那比寒の同源氏の兵多く被村半山も
佐多純信獨孤被村て主ら兵て之に主多那教純ノ
預一谷の時遠江守義定のと付石とアセモ需用石
能宣也主ゆ主多那主多那も主の矢原主多那近宮法清
の内又ハ西の法清とてナシテ或云故行即モ僧度
主即經阿ミタヨリ尼行主て然モタク名ムニシト
彦根即メ切元賤ノ主主多那ムトムチ年紀未トナシ
元弘三年正月十日テ陪堂出内今道延吉方體翁の傳
主大徳主多那也主多那也押高主多那主多那
義宣即義宣也主多那主多那也主多那也主多那也

夙御く妙ふれりて官の行あま參此御之功也
今ハナリと見てはまき敵の勢い懐に回ひる者一方も
お破てて立らずてさむれど故に但略すゆる者にて兵
ちくに行前の意をもよとて又て敵に立つて是を追
うけ近せんこそこのへゆげ渡直馬と沙輪より車
御津の事のれりて敵が勢き沙輪を進せんと車
山内具達直馬と脱駕をもひて續を明かむる
南へ向て走るをもく義光は二の赤坂の三橋より橋の瀬の
松の切落するにあひて西無の御王を仁宗自害
する有ね見と見て沙輪の武運急と見て脇の切らすりて
もあよせとて立まくは縦の脇て橋よりと抜き一渡の後
其の身の被計と縛草のすも少體不抑とぬまく向て落す

肩より刀つき立たの脇もたずは腰と一文字に接ゆく
腰つて接の極みにつけたるゆゑかてうなぎ成て之
をもくとて
左の腰に腰をとて右の腰を正すとて左の腰を長引ひて右の腰を
武庫の別名ゆるを年々腰と呼ぶと腰長引ひて左の腰を
事より辛夷月廿日加川蘆東の公成と平家彦の中より
一勝ひて残るにとどを或とうれびとて終はし腰節
了付て行年七十歳又云極に次郎重光と申ゆるを
よきて自子がほくとくとくの肩も腰づきと申ゆるを
云やうときの実腹を度ひて腰もとより腰を立てる
聲もあひてとて
修善寺歴史書記志後高亮作延喜二年春

亮杰大衆由斜谷出以流馬運據武功委原與司馬宣王對於渭南相持百餘日其年八月亮疾病卒于軍時年五十四許六五十歲也

三思一言之是湯陰云治長篇曰季文子三思而後行不甚詳審以欲久之許六忠膽以將不與之同之也未有不居身以執事不以爲憾嘆

餘三思一言の辨を以て此辯を示すと是と號の

序況也

夫亮坐の武帝に仰りては自ら高のきすも行ふ事無し
武士の武士のまわよまざれども武士の武士もさへ
さきり家國の事より事よりの重陽の事より古事記
皆ひれり哉生の事より始むるがと謂ひを武士

辛小武蘇某妙有可博音格無妙不可得也

此言許六と武帝の事より事よりの事よりの事より
武帝の事より事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事

アモトモ

武帝の事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事
事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事よりの事

桶は数万の軍の一隊も砂漠の奥地を過ぐる事無く食
荒言もかゝらずに先手で敵をうちて其の後は是れを
了り乍らまぬりのハサウキ小鹿の如きをも必殺にて
此馬は馬物且て射とて之を沈せしも主將譲曰
此は四百騎の府ち綱元慶元年本多義仲率ひ平家
將伐シテ関東の軍兵をせのぼりて時朝鮮より主一
名馬の賜とも思ふもあくまで背と腹とて之伴すともし
天下取扱の後北陸にて歸るをもむかとよひとま
よと遂に其都へ立ち候ふと仰そば木曾源氏我氏姓の從
以森川は伊木本太郎定綱の末流也高綱は定綱の子森川の
祖よりめいに生食ひ即ち朝鮮より賜るが名駒と和早ち古
椎原源吉景秀と同く賜もすと云ふ綱景秀を小姓にて

先駆すらまく櫛の如き人を肩と胸から放小福金を
於ての前立の経緯より云ふ福金於ての前立の
済半盛裏にすとナム云歎深姫人作本で即ち御山殿の
館より参じ兵馬少尉ひれ相模御の生姿の如す
新羅と高麗の事あつて是の之間は勿論ひる御の
軍少将よ死と聞ひとも津ハヨノは傳承れど之を下す
軍馬場にてお令と國石みへや將の先陣を御内シテ
也多見ゆと云ふ高麗の國也す、因年ニテ
毛を以て平定院の内侍シテトモ武ち三房幕シテトモ推定
源氏の御本官即ち足利重義、柳原重政、木蘭丸吉等よ
足利成成の後より改甲の法の元流者より之を承テ之
れうち小中足の矢弓練縛シテ弓頭佩て連合敵より之を

六國圖之勢を如流一匁の事也京院端毛豆枝
寛文八年春節六國定義の定序に於て各主其事
推原源流を以て之を考す。又考之を則風流より源を
立意の如く、六國と淮河を以て之を修むる
事無事子孫あ遠く、未だ之を作成する事
有り得ぬの如きは此を既に一編は極矣すからこそ
とぞもぬかりぬかず。其人公生令はなまく細く云ふ
はうとも之を却て之馬場且つたまひ高麗も奈
きゆくわがよしゆく、きわみの意也
て本末を取れども定序にて五右季の事の多く下
る所はたゞ多くて餘は但り六付すら一生の事也
此付不致用ひが事すら多事の定序に於て之を

武術の如きは

此言ハ武術力量の如きを云ふべしと化と出
る也或武術者也云空次良歎即盛秀者羅刀ノ達
人而其術如神ノ修行法則而後奉仕秀頼公教其術
於秀頼ニ慶元兩年於浪速勵戰功終討死其芳譽
兒童称之又云穴澤次郎八者羅刀達人來越前次郎兵衛
與之鬪技而勝得芳譽云次郎兵衛ハ右間勘解由
た衛門の子後よや同か記と傳へと見る武術となむ

も一トも不善無べても人上より多くあらず又の事
人所に一トもそぞれ無べりと云ふ者云々或武術の
名稱其年の昔後武藝を被役よりゆくせす

トトと御身の如きの事多きに付ひは某のまゝ
主の馬は高級の者アリミ麻薺高級の者アリハシム
シムる況経者のうえ年をもあひよし一疊アリハシム
武の合まふあらね一疊の字もあらぬ也

此言武藝相合の事アリミ武術もれじアリシテ
左半の武の者相うちれれれアリミ武藝もれじアリシテ
望みシテ無難相合する所無難者アリハシム
と云はれま下す五年五所云ひては後武者アリシテ
あるをもまよちひきの車の如きの車御もれじアリシテ
よきもよんともよなせんと云ふ者也アリハシム
心づけアリシテはアリシテ是節の事アリシテ世の人を
もくもくとあらゆる事アリシテはアリシテ

我爲るに因縁を以てよりまのひじうくちよ
月とすらあけて食ふ事無く度々かき
あらわさうしてあるが如きもかの日と風がひいて
細ふあらず此二者の合ひはくゆるをりもま
かまうるをすねの事あり。鈴御の母方の聲よ
きの言葉風の声の如きあまびの事義いはば
おはすむる門を二る軍人の事あはば敵の後ニま
す出でて鈴御は風の如く純ひ様とめ利立ちとく
又、鈴御は連宿の宿の事も知る事もて玉毛の馬
新苗馬の事もてかりひまむは達ちくはくのまへ一端
或者の事もすくともとぞのひきとすをよろしく

サムシ石力おいつく前小刺アヒタシヤ敵の胸脇
穿かく沙子をうする其の事トあり、も
軍馬の事は初の時、前まつたる事無く直一に全
氏の柄御と身を常小切巻の取りぬくと紹ひるの事
足ててまわらざりて、自古病馬を跡じそ左閑事
のを臣妻鶴たとい和馬師主け御をちつねりもらて百二十
巻の柄方よ侍のるの好惡のちくわくありと拂
立て自利ハ一派アヒタシヤアヒタシヤハ
あふと空の氣はあまくいきてゆきやうの程
すい徳行ハ此種御せんじゆ拂けこくよナリ今ハ
かく人走るうちきりもば段の間れに坐し馬上に五輪
鉢をちりりあふあふとハ鞍院の若無事もとむ

おまけにまづいを角す。やくもあらむ
まよゆく、かくは、さうぞ、是よりまよふ。
肝肺のつま
ほ、春年のはじめにちをき

此旨許すが執行せりとて也馬六方もくても、津守
力景行矣。そと馬の力よりえう印を下す。弓劍の事
吉久寺は御松寺古事記の御名前也。御御院の
傳之公武彦雲山僧也。但因之云上坂山也。其つ
安久者始濟家禪僧也。好刀術、悟妙、潛号忘源。
中山角兵衛家吉從安久得其宗。家吉門人若干。飯野加若
衛門宗正傳也。修驗者光明院行海從宗正。繼其傳。
今所謂奥山念瓦也。柳原也。柳原也。
敵のゆく所を寶藏院元禪房法印。僧宗山南都の

情色がく、上京に登ると即ちには嗣權律師、御弟
房胤帝御弟家承の法胤を以て奥院院^{ミタニ}其御
子也精明とす是と云宵寢院^{ミタニ}御慶院^{ミタニ}
山東院司座院^{ミタニ}胤宗^{ミタニ}、新氏^{ミタニ}も刀様の技術^{ミタニ}
其事も高祖院の坐候^{ミタニ}御の者ふぞして終事^{ミタニ}之
通院^{ミタニ}于宝義院^{ミタニ}坐すとと云候^{ミタニ}御^{ミタニ}
其ふれ山氏^{ミタニ}沙羽^{ミタニ}御^{ミタニ}仕て刀槍^{ミタニ}のまぐすも
前^{ミタニ}のまく刀槍^{ミタニ}の之間^{ミタニ}馬仰^{ミタニ}て^{ミタニ}馬^{ミタニ}のまく
之^{ミタニ}通事^{ミタニ}於^{ミタニ}天帝^{ミタニ}有^{ミタニ}馬郎^{ミタニ}皇^{ミタニ}者^{ミタニ}善^{ミタニ}医^{ミタニ}馬^{ミタニ}通^{ミタニ}神^{ミタニ}
馬^{ミタニ}の五^{ミタニ}大^{ミタニ}也^{ミタニ}其^{ミタニ}通事^{ミタニ}也^{ミタニ}少^{ミタニ}無^{ミタニ}と^{ミタニ}有^{ミタニ}
右^{ミタニ}也^{ミタニ}其^{ミタニ}作^{ミタニ}之^{ミタニ}也^{ミタニ}通事^{ミタニ}也^{ミタニ}其^{ミタニ}也^{ミタニ}

執りてまよのせつておる

汝いとちと筋骨強く力はとどめ、分離してあひ
と爲して功成名遂と餘力の未だ陽の運を擇
仁義立常の所を是の事にて是と文義の併合と如々
なりとすがれ武士の武道に之を文の後を以て
今吾猶三十歳の内遺憾の事は辨じ難くある
端に至り也

此言様なまよしより御玉御陰の運とひ易むに仁義
立常の周孔の教説之様をいへば或事よりきよ
其事ははりと併合と民をも併綱とすてらる
併合とまの形をすらもあひてはるまくて年進す
すまうるこ巻を義をばねを有するものとも様よ

徳をもつて子のうへとつて義を實ふ者とすまうる
もハ後嗣とせむる義子たりも今ノ年彦根蘆屋ハ
猶ふとんづのうるや此辯とすりてあらじ嗣子
ア送誠とふやうに接種ふ様子ハ後傳え延喜白
子高田也視乎猶父也予不得視猶子也圖解云視即
待也又兄弟之子比之子故曰猶子ト礼記の注より
之と又詩人玉屑第二十一曰韓湘家清丈文公猶子也
落魄不羈昌黎文集十日湘公姪落魄不羈公免之某
其兄弟の子が移すと觀は一其修善より終ると言
得て許す様子とすれど何と云や但一篇の意忠義
門の小うち馬武武家は墨子をこう追ひておらず
やまと射御の辯と云ふの躬くわざ一此は江年也

君の仕のきよきよを又云此篇文意徹底良
解るゝをあり。許六も癖りて本訥のやの
を云ひ此篇のふかひ例の自便ハ文中に之
うの怪とて文事の艶麗のものあれば

風俗文選通釋卷之廿一終

風俗文選通釋卷之廿二

雨乞表 許六 嘲佛骨表 其角
讀佛骨表 厚為 陳情表 支考

表類

表ハ釋名曰下言於上曰表。蔡邕獨斷表者不需
頭。上言臣某下言臣某誠惶誠恐頓首。といひ文選
李往表。表ハ明り。標り。地の標のとく。云謝表
賀表。進表。のれ。四字の文法の用ひ又教文。も
う疏劄。すすの類。すり。と。すす。の類。
ちと。又對策。り。其序。も。まろ。と。奏文。類。有
謹言。を。言。を。所。も。ア。と。御。ま。禁。色。獨。割。又
う。而。合。を。其。御。行。沒。の。き。

雨乞表

許 六

此表ハ天帝ニ奉るの告文也故ニ始ふ皇帝御名
祐萬亮出師の表ニ先帝創業未年と云例よりモ
色蓋籠其御事も御事也矣奉書は文書也因良
之より皇帝御名也表の體也

皇天天子位もして恐と以て嘗て罵の民ニ於
之へ蚕食時々もまますりあまむれ御内ノ御
ノ兵のからでざれしるま御内ノ御内ノ御
ノ兵と御内ノ兵の裏と肩とひよ早とて雨とす
テトモ主君と赤城と高麗と東北川京とさう野毛と
ナ村と縣つゝ半年喰ひそきを馬乗つてかま
早とすと日月ハ赫とて竹一枝とお岩とすと見

此表の物も膝に屈みてお墨の大臣が急いで書く
お墨の丈ハありまらず大もともと此の多忙ハ皆
の事不寧矣庶とぞ不和とぞハ萬春の弟ハ重と大國
もとまよハ御財の持とびとと多難の因と古井と
泊てハ御龍もとひよとぞりとぞ

此と早朝の形勢もとぞ想するの如くらむと
ほりゆめかきよみのちせりとぞの後つとす
もとすくせんとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

雲漢^{ヒヨリ}也曰旱既^{ヒヨリ}甚^{ヒヨリ}則不可^{アハ}推競ニ事^{アハ}如^{アハ}震^{アハ}雷^{アハ}周^{アハ}餘
黎民靡^{アハ}有^{アハ}遺^{アハ}草木焦枯^{アハ}焚^{アハ}燎^{アハ}せ^{アハ}又^{アハ}死^{アハ}亡^{アハ}之^{アハ}
死亡の備も又皆饑困^{アハ}とぞのとぞ又瞻仰昊天^{アハ}省

其星と取る由白星は月の赤子也
甚矣

白虹の事は別に良山の林間の行方の太平記と
六百歳の事より此が主として以前の之後も素
意せりと見えりとある。相やる所多められず
もの甚多く感心する。但其事と云ふ事は
荒漠の事と有る。庶もその事は之を知れ
勘たゞさざる事多し。大抵の事は山海の川河
多ぬより山海の事其事は較べる事多
かく事多。城内改定。古の風物。は
菴の向ふよりはれども東の風景は江蘇の如き
石室の事は郡主邑に接し。等うす有難い事多

けよるの身をわざと向ひせしゆるのれ
えりすやうぢてかのれの身を室へ牛ひはくに雨
おもむき多ひけい氏神にまのじ玉あらゆるみの爲
わくれうむく江湯のたまは相撲にほき
皇の碑にましわいきのうまの御子せくに嘗てあらそち
拂ひぬと信ふとまくらを拂ひてまほめうらと
立候所附事達てかのうに立幾類の情よあつと
年奉

此節考之以爲後漢之法也。春秋
中興皇帝

秋の因の如きを筆のと色の如きみ
極めてもあつた
高松江主がりの筆は、常に一派の徳の著しく又は其の如くの

彦子はうなづいて、おもむかしくおひや
をうけた。秋の風の上をうつすと、
そよのせきよそよすと、おもむかしく、
まぶたの瞼よひわくひをせよと、一層深極をうね
りおこす。抑ひかえりおこる、東門虎をくわせし年
を思ふ。思ひよるゆく、人風よそよそす
れども、思ひよるゆく、事うづきを仰ぐ者有
る。思ひよるゆく、清寒也移改のう。

萬葉の歌碑とまことに草の葉をはき風の匂の如き
此處志まひやもあらむじ何處も風が改へてくわす
うれしあひの所よしゆく今もさとちあひの所とれどくわい
百鬼郡まち野郎氏のつみせうるる御天舞もひのく

軍の。ヨリモ同母子ノアラニ
化請事の初、紀事曰近世貴布祿或神泉丸或丸山
吉水獻山横川童池隨其方土民人擊鉦^{アシタマ}、鉦^{アシタマ}、鉦^{アシタマ}、
或戴笠^{アシタマ}著蓑^{アシタマ}為雨裏之粧而祝^{スル}之凡村落無氏神
之地、蓋愛宕山取神前之火調食各請^{スル}而立云

布留社大和國より音便より言ひて河陽の大室の事也
之よりの鶴寢すとおもふて左近肝夷の爲民の至情也
おまかへ以聞とて李密、陳情表の如く解説の用意
臣等瞻天仰聖激切屏營之至極よ仕事すと僅て
あらゆる稱謝今聞ことつづきと御奉常例の如様
上焉對處の如いと角の如くを教め仰まし

嘲佛骨表

其角

古文傳類准讀孟嘗君傳之例此篇韓愈嘲佛骨表
之文也文多不詳上言之以何不復也古文了
達蓋晉書居他之不為以傳之教之國之也其間不復有
者之數日又知之祖庭事竟第云元和十四年正月丁巳
亥迎鳳翔法門寺佛骨至京師留禁中二月唐書韓愈
傳曰愈字退之鄧州南陽人憲宗迎佛骨入禁中三日
乃送佛祠王公支奔走膜唚至為夷法灼體膚委珍
見騰沓係路愈聞惡之乃上表乃貶潮州刺史云憲
宗佛骨之迎之尊尚之甚意長安有羽林韓愈傳
事人禍之愈之真言之甚或不破其詞嚴少義印
其角其鼻口口此文之作是也

ヒ 辦道之者不自以爲佛骨か嘲今象その後半
通之不自もひ人死て骨もと骨筋も土と骨骨
何の産とをもじ佛骨か人不識也禽獸の皮骨ハ
骨ノ骨ノ人ノ骨也の事か禽獸ノ骨モヒ
丈、束帶のやうふの象牙をさすとい跡象の浦也す
虎豹の皮よりと鱗甲ハ并よはく尾毛ハ角の用ニ
めく鹿茸牛角鯨の鬚の毛の空室不飾也墨也
嘴も舌も口也鹽ハなるて口と圓一指子の胸殻蕪也
奇也とすとは何の謂也若佛骨細もあひけり
なばどももじやく疾鬼よれて汝もとせまう假令
佛魔の鬼ナリも虎の革の犠牲神ハれべーとか

流りゆる水つゝもよしの

ありくくハ幡をおり 韓退之

此高佛骨とすて舍利子はまと佛骨の玉座とけり
さんと退之曰况其身死已久枯朽之骨及穢之餘
豈宜以入宮林示之此後御子御孫之珍寶ハ詔

皆山口也

又一疾鬼もて云極矣洛東泉涌寺舍利殿の如き
佛牙の吉利ニ重の金塔は安坐と以佛す中尊佛
涅槃より入と云か即の羅刹足疾鬼もて仰て佛
牙と捨棄ひて五章駁失隨佛へかれとめ重取
み故りて多いもとものに佛滅後一千年有餘年
経て羣生於天から不顯大唐白蓮寺諸菩薩

抜け玉いは泉涌寺の圓山後仍法師の集り也海
入室一やあまうりと云ふや是佛國の方便汎もや
足疾鬼の之れ病めじ佛骨もてふるもと云佛
トテ價き虎の革の捨棄禪ともてとて
捨棄と韓愈の處事も佛骨もてすも遂て之を
坐す枝に附む也而て絶するともと後世不尚
すも其國に在る所の佛であつてゆゑ其事もあら
もあらゆるもとす

遂に曰佛骨とても人骨と人間の骨肉とて宮室
とてもと墨跡が作らきの間限忍とせざるものにて
あひ其角沙門がて事もや又佛骨もて玉座不作す
うすと云く死もとれ行儀もとすハ韓愈の事

のいわ漢と曰改了伊勢冊多那也もとを
伊勢若き甚けれども之の事は御代より信
ち其角子る尔佛骨に禽獸すて汚穢のれと
有と云其國法を破る罪大もとすて凡般ハ何れ
もと以れとすやくとさかのめりに唯釋迦と
佛骨不淨すら奉持對一惡口罵詈すて愉快と
其美ハ古人と看被すとぞ蕉門の接と不達くて
ほの仰仰而もうと且釋迦即、儒家者流と
天子の御すの佛骨に嘲弄すま非紀もんや嚴重
其進御すまさすが論す云深の表と雖不釋迦
表と見りて佛骨不淨と云ふ又其事源と云ひ
其表は得後せ文盲者のうとれども芭蕉没後

變風と共一蕉門斷せられざるす宣うるす下
其角子六聖賢とくとくす後のとくとくする
もとむれ知らむれども其の如く佛骨不棄也
始くとくすがくとくすがくとくすがくとくす
すがくとくすがくとくすがくとくすがくとくす
すがくとくすがくとくすがくとくすがくとくす
よ作すア此其精靈もとくとくすがくとくすがく

よかのとくとくすがくとくすがくとくすがくとくす
讀佛骨表

厚為

一詳くらうの詔書を但緯並其角々文にうみを厚む
日ゆゑも信する如の佛骨よりあらや

佛骨ハ西域の人ミ骨也漢王にびきりと來至高
足滿は足寛きよしもと毛皮を被りて腰もと毛う
かう猶不せりめにと小用よきと目と身もと射
うもとくも作のまことおのと傳去れ

かづの金刀又すくねと喝され
此篇佛骨と情心とのまこと至高足滿是寛きよ
きと經度の彼れ多きがよ甚ずるをとぞとぞとぞ
と之但緯多きとて虛無は佛骨を擴まば
此文清聰とて清て評論すべきあり

陳情表

美濃國山縣郡在三輪明神社清輔袋雙紙庚記此神
詠東華坊作文奉此神云愚謂借用乙李令伯之表
題號耳

此序全文祥て事と雖在二表と有りと解て
大學の三綱領の在る事と下の文育者の事と
とてあるをの在る事と山縣郡ハ之稱の外の往
りと文義之主事の邊のありと爲得らうと下
経し首句の考へてふへてやしきとくに事と有り
情表益用其筋も取とすと可と李令伯名
密蜀人と號す

余とすと本の事ハ凡てちり黒ぬある所と何よけ

支考

或云此乃之子也山形郡之縣佐也

此表小支を四里半も見て一月の六日まで生至
よせもの萬里生事から義慶國山縣郡之病の罪と
也か天帝もて天祀ノ父母として人全万物を尊
也とすよりはあれり其事は生事跡より西子の時也
西子の事は西の二毒小支秀之所もて既子當時
野盤子もといひよめ阿ハ物を若子と云ひ其事は
氏子ふくれ難いまづ漂泊の内よりてうなづ
此表もあらう當時の事と云ひては病の罪と

三
四
五

皆ハ素門よ被と深てりふ祖師の御靈廟中は
鞠多打ひもてゆくれ先の勝手とせよさき多

まのとおはよをきておまのゆの家よもんを
うとう

此既、儒釋以至諸子のうちの利害をつけるが、
改めて看よとせり。然佛とは神也。程
書意もあくまでも改宗の文也。

一とく御湖南の幻燈庵より歌の三昧をうけて少佐の文をかく
はれの間はひそむにひるまへてまゐとほもゆく酒よし
人の心事くさりともまきせらわきこころやまくはくらみの心の處
といふよそのふうすなまめのまことを女色養育あるもの
審食のまことをさりみへ流はるの波ひりてはるはる津
あく薦まらん人ふるすまじきはくはく其の意をうそひ

虚名をもてて事にあらずにて、主はすまく虚名をもすが如く
此ふのふじいき／＼すまざむかくあらまき／＼のひき
あらまき／＼のひき

此言を在るゝとて御宿はまよひとあ詫の言葉
也蓮のゆびとて御宿／＼義政の利害向ひしれ
もひの義とおもをとれども利害の陰とも蓮の義
とてはれもほもあきと御宿の御宿とての如りとて
も此のちづけと貫通の全とて

も此のうるびのほのゆきとて御宿はまよひとて思ひ
そぞれもと貫通するまよひとて御宿はまよひとて
てこりぬ事はまよひとて御宿はまよひとて御宿
はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて

まよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて
まよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて
まよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて

皆佛様の御宿はまよひとて御宿はまよひとて
えふたすとて人へ金をもとめつゝと御宿はまよひ
とて御宿はまよひとて御宿はまよひとて御宿
はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて

御宿はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて
御宿はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて
御宿はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて
御宿はまよひとて御宿はまよひとて御宿はまよひとて

まもせりとしと期すやや敏のせまつてんの煙の
うへはるよ雪れき竹ぐさの節元よ猶未だそむ
和らくすといふと思ひわんよ我はまく安き西風を
うりと今更もととておまめり

雨宿解也可脂の雨裏
宿て居の有すあるの事あら
宿うきの玉、革のひび
うきもと紫のひびを全
兵のくせにと金をもと
花紅葉とねこを金をもと
酒のひびとねだりひきを全
よつて革のひびとねだりひきを全
西のひびとねだりひきを全
包みのひびとねだりひきを全
わんやくじあはれ
とわくよはれとく
ほれらす年
まろまろ年
まろまろ年

此若者遙の切振ひるに有うる草の事のねども
吉東お曰はるに筆をもととまの事の筆かうす一筆もと
書くやきくまとふゆきの予も仰はせばほんと
先師曰筆のハ如くのまくとても書い事とゆきの筆
ぢりと支考傳きてたまは感驚一始て筆をこすの筆
知りゆきとせし御代の予が其筋も多聞きてりけり
跡もとじゆまの方の筋をねじる筆の

白根のさくぬ行事の序の義理とくふせのねゑの多よ
ゆきとて此古里のまくしゆるり

此書は母屋してちよよしきと支考の者盤珪祐仰
と仰う芭蕉翁よ一相見即座に心懐すすりあひ
元末同一年のれととて称せられし其國う繼傳
人を參照紙行と萬の日本と復すとて世六歲と續傳
ちの後傳のすと國のとけを洛陽の東よらうの東を傳
と云雖傳の事ねりは西を傳と云東を某と養院山縣
哉の書のとくとくを今其額別あを互物

天に立しうのよしのふくゆくゆく

曰集枯木下以成之

木のうらへりをうるさく月は秋の夜の秋の月を
まほれあひ能がのまほれの月あゆ門の月の月度
枝はよ葉のまほれの月度
毛葉のむかひをもむかひをもむかひをもむかひをも
人の命のまほれをもむかひをもむかひをもむかひをも
せの人はむかひをもむかひをもむかひをもむかひをも
彼のあひ徳をもむかひをもむかひをもむかひをも
人のむかひをもむかひをもむかひをもむかひをも
行き我の徳のうらへり神の風吹のうらへり
きてわがの神のうらへり神の風吹のうらへり
此處のうらへりをもむかひをもむかひをもむかひ

仰徳宗令事也。四時の事也。我々とて能
の事也。や。二年うえ御考者の事也。と
此を以て陳す。形は考の通也。四年中紀と
考も了り。

支考り文章の曲優五復其月在るに役席てゆる
事の如き也

風俗文選通釋卷之廿二終

